

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和2年 2月14日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	柴田翔平

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
コンゴ民主共和国、ルオー学術保護区、ワンバ村
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ヒト科におけるオスの共存メカニズムの進化-Pan 属 2 種の比較-
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和元年7月21日 ~ 令和2年1月18日 (182日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学、Wamba Committee for Bonobo Research (WCBR)、古市剛史教授 Center of Research for Ecology and Forestry (CREF)、Jaquie Batuafe Bakaa
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
2019年7月21日から2020年1月17日の約6か月間行った、コンゴ民主共和国での調査について報告する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>スケジュール</p><ul style="list-style-type: none">・2019年7月21日-7月22日 出国 (犬山-成田国際空港-アディスアベバ-キンシャサ)・2019年7月26日 移動 (キンシャサ-ジョル-ワンバ)・2019年7月26日-2020年1月12日 ルオー学術保護区ワンバにて調査・2020年1月13日 移動 (ワンバ-ジョル)・2020年1月14日 移動 (ジョル-キンシャサ)・2020年1月16日-1月18日 帰国 (キンシャサ-アディスアベバ-成田国際空港-犬山)</div>
<p>調査期間中、E1 集団のオスのボノボの追跡を行った。毎日一頭のオスを追跡個体として選び、追跡個体の状態、近接個体、所属しているパーティの構成を記録した。ほとんどのオトナオスは集団の周辺部で観察されることが多かったが、母親の生存しているオスは集団の中心で、母親や兄弟、他のメスと一緒にいるのが良く見られた。母親の生存していないオスは自身を守ってくれる個体がいなかったため、集団の中心で過ごす事が困難なのかもしれない。</p> <p>10月から12月は雨期で、毎日のように雨が降っていた。雨で気温の低い日は、ボノボはよく樹上の高いところにベッドを作り長時間休むが、そのような時も、母親のいないオスは他の個体から離れた場所に一頭で休んでいる事が多かった。</p> <p>オス間の攻撃交渉は頻りに観察されたが、その大半が威嚇や追駆行動で、身体接触を伴う攻撃交渉は一度も見られなかった。オスによる攻撃行動は Jiro と Jo という二頭の個体による挑発行動によって引き起こされる事が多く、この二個体は頻りに他の個体から追いかけていた。彼らがパーティにいない時は、オス間の攻撃行動はほとんど見られなかった。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

滞在中、オスが怪我を負っているのを何例か目撃した。彼らがどのようにして怪我を負ったのかは直接観察していないが、オス間、もしくはメス-オス間において怪我を生じさせるような激しい攻撃交渉が存在する事が考えられる。メスが同様の怪我をしているのは一度も見られなかった。



写真 1. 右目の横を怪我した Gauche



写真 2. 眉間を怪我した Dai

調査の傍ら、フィールドのマネジメントを5か月ほど担った。森林環境研究所と現地住民による会合にも何度か参加する機会があった。現地の人々が保護区内での暮らしの中で、どのような不便や困難に苦しんでいるのかを知り、我々にどのような支援ができるのかを考える貴重な経験であった。我々の研究は現地住民の理解と協力の上で成り立っており、彼らとの良好な関係をこれからも維持していく事は非常に重要である。今後も現地の支援活動においても積極的に取り組んでいきたい。

6. その他 (特記事項など)

今回の出張を行うにあたり、研究に関して指導、助言を受け賜りました古市剛史先生、橋本千絵先生に感謝いたします。本出張は、PWS リーディング大学院プログラムの援助を受けて行われました。感謝申し上げます。